

環境と人間Ⅱ

森林・里山と人間

日時：平成21年8月8日（土） 13:00～15:00

講師：只木 良也（名古屋大学名誉教授）

概況



I. 森林：世界の中の日本、日本の中の濃尾平野

植生は降水量によって決まり、湿潤な地域において森林は形成される。日本は年平均降水量が1700mm以上と豊富であり、国土は森林で覆われる。また、国土は縦に長いので多くの気候帯を有し、亜熱帯 - 常緑広葉樹林から亜寒帯 - 常緑針葉樹林まで様々な植生がみられる。森林面積は2512万ha(国土の2/3)で、人工林がその40%を占める。

愛知県の森林面積は221千ha、その内人工林は141千ha。標高400mまではシイ・カシなどの暖温帯照葉樹林、それ以上にはコナラ・シデなどの中間温帯落葉樹林が分布する。かつて山地荒廃と復興の歴史があり、現在は復旧・遷移途上の二次林が多い。その中で、今尚継続するマツ枯れ、タケ林の勢力拡大、カシノナガキクイムシの被害拡大などは憂慮すべきことである。

II. 上流森林の恵み

木曾川水系の良質・豊富な水は長い間人々の生活を支え、その流域には昔から豊かな森林が発達した。木曾ヒノキは高級木材として利用され、特に江戸時代には尾州檜として尾張藩の貴重な収入源となっていた。1600年代の大伐採とそれに伴う木材資源の枯渇により、厳しい管理体制が敷かれた。良質な木曾ヒノキは、500年程前から伊勢神宮の式年遷宮に用いられている。

Ⅲ. 「自然」を維持するために

日本の諺「あとは野となれ山となれ」は、日本における植生の遷移の様子を表している。遷移とは植生が自然に移り変わっていく現象であり、その土地の生態系が完成されていく過程である。日本における一次遷移の最終段階(極相)は陰性高木林である。農業や林業、畜産業などは、遷移を抑制しある遷移段階に留める、または遷移を人工的に短絡化することで行われる。自然保護を目指す場合、対象地域の自然遷移を考えた上で、保存、保全、防護、修復、維持といった手段を適切に行う必要がある。

Ⅳ. 里山の保全

農地・農村は周辺の森林によって支えられてきたが、収奪の結果土壌は劣悪化し、貧弱な植生景観を持つ里山となった。昭和 30 年代の燃料革命により、里山の収奪は停止したが、人が全く干渉しなくなったことで今度は荒廃し、開発対象となった。里山を利用しない現代、里山を保全するには「なぜ必要か」に対する理由が要る。よって環境保全機能論的に、生態系論的に、文化論的に里山の価値を示し、また、新しい時代における里山の利用法とその管理法を模索していく必要がある。